

学園便り

遊楽部学園
自治会

異国(韓国)での思い出



高見貞子

道老連文集「北陽」掲載

私の父は宮城県仙台市近くの築館町で大きな農家の長男として出生、農業に従事しながら私たち四人の女の子に恵まれ暮らしていたが、同郷の友人に「朝鮮に行つて働かないか、川の砂金とりに一攫千金」と誘われ、昭和九年に家族を残して旅立つ。



八雲鉱山時代 妹と水汲み 小学校五年

二年間生活費の送金もなく母方の兄弟が心配し、母に朝鮮に行くよう勧め、四人の子供と母と初めての異国への旅立ちでした。当時私は三才でした。父と再会しましたが砂金は思うように採れず困っていた矢先、その町にある中外金山に就職することになり町から約二十キロ離れた自宅で生活する事になる。

広い敷地にブランコの遊具があり、二軒長屋の一軒に落ち着く。すぐ側の裏山に大きなアカシヤの樹があり、春はアカシヤの甘い花の香りに包まれ、秋には桃の実がたわわに実った。

冬は雪は殆ど降らず零下十度以下で登校が辛かったが家屋はオンドルで暖かった。登下校は定期バスがなく会社のトラックに乗せてもらうこともしばしば、学校は日本人と朝鮮人と区別されて建立されていた。

昭和十六年十一月に双子の妹が生まれる、戦時中で粉乳の配給も少なく育児も大変だった思い出がある。

昭和十八年五月に北海道八雲町の中外鉱山に転勤発令され、十年間住み慣れた朝鮮を後に連絡船

で下関に、ここから汽車に乗り東京で下車、東京本社に父は挨拶に行き、父母の実家に二泊して八雲町に到着、次の日はハイヤーで(昔は定期バスも無く)八雲鉱山職員住宅に住むことになる。

町から三十キロ離れた場所にあった学校は四・五・六年生、全校で三十名程であつた。朝鮮とは大きく生活環境も変わり自然が一杯ですぐお友達も出来た。昭和二十年八月十五日、日本晴れの暑い日だった。

校長先生よりこれから大事なラジオ放送があるからと、職員室に全校生徒集められ、天皇陛下の玉音放送があり大東亜戦争が終結したことを知り、之からの日本はどうなるのか、不安と悲しみでクラスメートと教室で泣き明かした日を今も鮮明に覚えている。

転勤で北海道へ来なければ私たちの家族はどうなっていたのか、転勤のお陰で平和に生活出来ていることに感謝している。有り難うございました。

私の両親のいつ

高見貞子

私たちの父の仕事の都合で十年間韓国で生活をした。父はどこで料理

を習ったのか、当時餃子の皮等も市販されていなかった。家庭料理で餃子の皮も作って主に水餃子を作って食べさせてくれた。うどん、そばも手打ちで作ってくれた。

そんな父を見て育ったので私が結婚した年の暮れ、に親戚より頂いた鶏(頭を切られた)を私の家では父が料理していたので当然主人もするものだと思い、「お父さん、鶏をさばいて暮れるんでしょう」と言ったらそんな事は女の仕事だと云われ、仕方なく泣く泣くさばいた。私の父は特別だったのだと思い知らされた。

八雲町に住むようになつてから家の近くに映画館があつた、私と姉妹の三人中、一人づつ父に誘われて行きましたが洋画が主でした。夕食を済ませその日は何となく嬉しく父とデート出来るかと期待します。

父が帰宅すると何時も和服に着替えていて、格好よく、投じ男の和服姿があまり見かけない時代だったのでそんな父の姿が嬉しかった。

映画の帰りには批評しながらルン気分になつて帰宅したものだ。家が变わつて私が二階の六畳間に住むようになって朝四時頃になると下の部屋に寝ている両親の朝の会話が始まる。殆ど毎朝の様に、有る

とき母に朝早くから何を話してるのかと聞いたたら「あんた達のことなよ」と言った。そんな毎日話す材料があるのか…父のも聞いて見ればと後悔している。

今私が結婚して子供一人、札幌で結婚して暮らしているが、両親の様に話す事など無いに等しいの一体両親はどんなことを話し合っていたのか、今思えば録音も出来たのに…と悔やまれる。

私たち七人の娘に恵まれて一人は双子の一人で中学二年の時に、顔に出来た面癪が原因で亡くなった。

昭和十六年大東亜戦争中、七年ぶりの妹の誕生で私たち姉妹が子供の子守役だった。妹が死亡した時の母の落胆、四・五日は朝食も食べないで悲しんでいた姿は今も忘れない。

父は六十二才の時、肺がんになり、北大病院へ入院し手術したが転移していたのか、退院後地元病院に入院治療していたが、二ヶ月間であの世に旅立った。その後母は一人暮らしになったが、私の息子三才が日中は一緒だったので母も助けられたと思う。孫も成長して札幌の大学に入学、又一人暮らしになった。私が近所にいたが働いていたので思うように見て上げられなかった。

昭和五十八年八月、突然自宅で倒

れ近所の人の連絡で救急車を手配して下さり私の勤務先にも連絡を受け早速総合病院へ行く、意識はあるが脳梗塞で絶対安静、排尿カテーテル挿入され点滴のカテーテルで身動き出来ない状態、水分も口からストツブ、姉妹達に連絡をとり病院に来る、母の姿にこれからの付き添いの問題等相談し合う。出張した時札幌の病院に入院予約してくる、転院予定でいたが肺炎を併発し両肺ともに呼吸困難な状態が続く、転院どころか入院して水一滴も与えられず、八月二十五日あたしが最後を看取りました。転院出来る病院が近くにありました。助けられたと思うと残念でたまりません。母は七十六才の生涯を終えた、もう一年長生きしてくれたら盛大に喜寿の祝いをしてあげたのに残念至極に思いました。

聖断

近藤国太郎氏

近歩二会 元会長 陸士五十六期

木下正隆氏 遺書

昭和二十年八月靖国神社にて

「爆撃にたふれゆく民の事を思
いくさをとめけり身はいか



平成16年札幌パークホテルで天皇を奉迎された時の写真

ならむとも

昭和二十年八月十五日 昭和天皇より終戦の詔書が天皇自らの言葉によりラジオを通じて日本全土及び電波の届く総ての戦場に漏れなく伝わるよう発表された。

日本の陸海空軍はこの放送により、総ての戦場が終戦となったのである。思えば日支事変初期は勝った、勝ったの報道であったが対米戦争が開始され、ガダルカナル島の激戦、ミッドウェー海戦の敗戦に陥ってから一切報道されなくなっていた。

にも拘わらず日本国民は一致団結をして衣食住等総ての生活の自由を我慢して堪え忍んできた。今や米軍は東亜地域の制空権及び制海権を完全に掌握して日本周辺洋上の主要な島々の日本陣地を撃破していいよ日本本土に軍を進めようとしているのであった。

殊に昭和二十年六月には沖縄本島を完全に攻略し終え、次は九州が四国か本州かの所まで先頭局面は押し迫っていたのである。

打ち続く米軍のB29の焼夷弾爆弾投下のために各軍需工場は風潰しに爆破され、補充が全く間に合わない状態だった。首相の東条英機は陸軍大臣を兼ね、軍需参謀長まで兼務することになり、空前の実力を握り独裁を極めていた。他人の意見を受け入れる雅量に乏しく遂に小磯内閣、鈴木終戦内閣となったのである。もしも終戦の聖断が遅れば米軍攻撃と北からのソ連の攻撃により日本は完全に占領され滅亡したのではないだろうか。

「陛下の忍びがたきを忍び、耐えがたきを耐え…」のお言葉、しかしさすがに日本国民であるお言葉通りに粛々と終戦をなし、敗戦の復興に寝食を忘れて頑張ったのである。終戦より七十年を経た今日のように見張る復興を成し遂げ、しかも先進国として世界に雄飛貢獻している。しみじみと日本人の優秀さを思うと共に聖断により日本国をお救い下さった昭和天皇の偉大さを崇敬申し上げます。

「玉音盤奪取の偽師団長命令」

十五日午前二時、師団長命令が出されました。宮城と外部の通信を遮断し、玉音盤を奪取すべく宮内省の搜索を行えというものです。

芳賀聯隊長はこの命令を不信に思い、「師団長がよくこの様な命令を出しましたね」と参謀側に問いかけましたが、古賀参謀は「師団長はしぶしぶ承諾しました」と答えています。

いずれにしても、命令に従うしかありません。私は賢所に待機していましたが、ある隊は夜を徹して宮内省を搜索しました。ある隊は諸門を封鎖し、情報放送関係者を監禁しました。

しかし、探せど探せど玉音盤は見つからず、午前5時までに決起

計画の要であるはずの阿南惟機が自刃にかかっていること、(介錫を断っていたので数時間かかっている自刃となった)同じく決起の一躍を担うはずの田中静吉東部軍司令官が、営庭の近歩一聯隊を抑えていることが情報として伝わってきました。この時点で私は、天の時は過ぎたのだと覚悟するに至りました。

その頃、東部軍司令官から合同の要請が入りました。実は田中司令官からの要請はこれで二度目でした。さてどうするか、参謀側にはとことん籠城するという意向もあつたようですが、私達はそれを

振りきり乾門に出向きました。

そして田中司令官から、森師団長が殺害され偽命令が出されたことを聞き愕然としたのです。

佐藤大隊長と私は抱き合い涙を流しました。近衛師団の指揮権は田中司令官に移り、かくしてこの騒動は収束しました。時はすでに15日の朝を迎えていました。

この様に終戦をめぐつてのクーデターは参謀主導で動き出し、近歩二聯隊はその計画に巻き込まれる形になりました。確かに実行部隊として宮内省に入ったり、要人を監禁したことは事実です。

しかしその一事をもつて、終戦時の近歩二聯隊を二・二六や五・一五事件の系譜に連なる「反乱軍」と位置づけすることは、必ずしも適切でないように思います。

あくまでも国体護持という参謀達の思いは、極めて純粹ものだったと思います。芳賀聯隊長、佐藤大隊長、そして私の3人が、あの時籠城することを選択していたら、終戦は長引きソ連の北海道侵攻を許していたかもしれない。そう思うと、今も万感の思いが胸にこみ上げてくるのです。

追憶の八月十五日

日光儀仗兵所勤務より一ヶ月終えて原隊に帰って来ました。

帰隊直後近衛師団再編成があり、私も第五中隊より新設第八中隊に移籍し初年兵教育班長を命ぜられ、専念しておりましたが戦局は益々激しくなり、連日B29爆撃機グラマンF6Fの艦最機の攻撃にさらされました。

私たちの兵舎は靖国参道を通り、田安門をくぐり現在の日本武道館の所に近衛二聯隊向かい側に、一兵隊南側に、旅団司令部、師団司令部、東側に関東軍司令部、その横に三〇七五部隊、航空隊、女子隊と重要建物が集中していたので敵機の攻撃目標だったようでした。そのため中隊は焼け野原の上野不忍池のほとりにあつた民家の瀬戸物会社の地下倉庫に原隊に留守要員を残して後は地下倉庫で寝起きしておりました。

八月十四日午後零時地下倉庫に突然非常呼集のラッパで飛び起きた週番下士官が全員守衛用衣袴着用軍装で屋上に整列と告ぐ灯火管制のため、行動は一切暗闇の中で懐中電灯一ヶだけでの行動だった



昭和20年5月近藤氏

た。地下倉庫屋上に整列すると中で命令が発せられた。隊長はこれより乾門より宮城に入るその前に実弾を支給するが取り扱いは慎重にとの話があり、兵器係より小銃弾一人三十発、機関銃弾三百発の配布を受ける。

取り扱いは慎重にとの話があり、暗闇の中、真海八中隊長の後を速歩で乾門より宮城に入る。襲の無いのに何か心の中で尋常でないとの感がよぎるも誰も言葉に出す者はいない。まもなく宮内省前に到着真海中隊長より真つ暗な

をつれて吉田少尉の指揮下に入り、宮内省二階部分の搜索に当たるべし命を受け、宮内省は地上三階、地下一階の広大な建物である、それが管制下で電灯が点けられないので不気味な感じでした。

目標は極秘に録音されていた玉音盤とポツダム宣言の降伏文書の奪還であった。このとき後で解つたが東京湾にはミズリー艦が停泊し降伏文書を待っていた。宮内省の搜索には将校以下が宮内省の役人を詰問したり文書を検閲した

目標のものは発見出来なかった。

その他の各部屋も他中隊が、中央放送局には玉音盤があるというので後探したが発見出来ず十五日全国放送された。各部隊が探せど探せど発見出来なかったことは戦争終結を早めたことが今となり良かったと考えられます。

マッカサーと昭和天皇

また搜索のなかで宮内省の役人近は一貫して黙秘を通したことはさ藤すが日本の将来を熟考した行動だ伍と我々軍人にも感ぜられました。

長 その後の情報で上層部は木戸宮内大臣、米内海軍大臣、阿南陸軍大臣等のポツダム宣言受け入れ論分と東条首相、荒木大将等の国体護隊持が判別するまでは本土決戦論が

真つ向からぶつかり、陛下の御聖断を待つ仕儀になっていた時、陸軍省参謀等主導して近衛兵師団を巻き込み、森師団長を暗殺、クーデターが他の者が知らない処で進行していた。

私たち吉田小隊も探せど探せど目標物を発見出来ないで、宮内省入り口から坂下門広場に出た途端、目に入っただのは他中隊の兵が円形に取り囲み真ん中に女官、外



近衛師団司令部



昭和天皇

側に皇宮警手を並ばせ厳しい身体検査をしていた。

昨日まで一緒に守衛勤務をしていた人達です。何とも言われないう感じで一杯でした。結果は一つ出て来なく搜索は失敗に終わりました。その時本部命令が来て、各隊は五時までに賢所守衛隊司令部に集合すべしとの命令がくる。

坂下門より鉄橋を渡り守衛所まで来て驚いた、朝靄も晴れて見通したのは軍隊の波であった。近衛一連隊、二、七、八連隊騎兵四連隊、野砲特科隊等、近衛師団全部隊が軍旗を奉じ連隊長先頭に参入していた。また上空には厚木航空隊から戦闘機が出動して本土決戦を敢行、最後の一兵に至るまで戦い、無条件降伏反対のビラを無数に東京都内にばらまいて低空飛行



平成天皇の幼少期

から拡声器で近衛師団に呼びかけていた。

そうしている内に午前十時に各隊は賢所守衛隊前に集合すべしとの命令が来る。十時になり整列している高い壇上に師団長が上がつてきたのを見ると森師団長では無く関東軍司令官田中大将である。このとき我々下部の者は十四日クーデターにより森中将は青年参謀により暗殺され偽師団長命令で行動されていた。

この時点で近衛師団長の職責は直ちに田中大將に移管されていた。このことは十五日正午になって初めて情報を聞かされた。田中師団長は前將兵に次の様な訓示を行った。「大日本帝国は本日をもって終わりであり、我々近衛師団は禁裏守衛の大任を受け八十有余年

御守衛申し上げて来たが本日を期してボツダム宣言を受託し無条件降伏せり、天皇陛下の君側にありながらこの様な事態を引き起こしたことは海外に悪銭苦闘している六百万戦友に弁解の言葉も無い、本日十二時全国放送で玉音放送があるので謹んで拝聴するように」との訓示がありました。

尚、玉音放送一時間後にこの場所で師団長以下全員自決する、もし遺書を書き残したい者は書き残しなさいと宣告され休憩に入る。銃を又銃して芝生に腰を下ろしたが誰一人として遺書を書く者も、話しをする者もない中で十二時近くになり、玉音放送のために整列した十二時丁度になり、玉音放送が中央放送局より全国放送された七十年前のラジオです。聞き取り難いところがありました。天皇陛下の国民を憂う断腸の思いのお言葉は七十数年たった今も脳裏から離れません。

敗戦の事実と全員自決が頭にあり、茫然自失という言葉がありま

近衛兵軍帽



近衛歩兵第二聯隊 第五中隊会

すが正にその時の心境であつたと思います。頭の中は真っ白になり何の思考力も浮かんで来ない状態でした。一時間後に自分が自決するという事が恐ろしいとも何とも感じられず命令至上主義の軍隊教育の然らしむる事だと後で考えました。この日は東京も今までにない位の晴天で、動かないでいても汗が出るような天気でした。そうしている間に一時間が経ち、將兵がが整列すると師団長が立つて都合により各隊は速やかに屯営に帰還すべしと短い言葉で告げられました。その時は全員自決



機英条東を執る指揮

動力にして戴きたいと、イデーターの参謀三人は自決した死を覚悟してこの場はとの連絡がありました。兵舎に私に任せて兵を兵舎に帰り待機していると、周香下士官帰還させてほしいと涙が。中隊の。中尉。少尉ながらに要請し、田中が自決したという会報がひっきり師団長もこれを受け入なしに入つて来た。

我々生きているのもに暮れていった。平成十六年六月、古賀参謀の要請のお陰天皇皇后陛下が北海道に行幸さであつた。師団長の屯れるとの報が道及び近歩二会より営帰還命令により兵舎連絡があり、北海道在住の近衛師に帰還するため鉄橋に団兵二十人が札幌パークホテル七かかり二重橋越しに宮階にて高橋知事先導にて奉迎申城前広場を見たら愕然し上げました。

とした光景が目に入つてきました。陛下より種々優しいご下問があり感激で一杯でした。想い出せば

玉音放送を聞いた東京都民が数万人集結、腰を曲げた旧軍人が胸に勲章を付け、又、和服の人は紋付き羽織袴六十年ぶりに御再会して昭和天皇陛下下万歳と拳銃皇亡き後日本天皇としてご立派にで自決する者、日本刀で自決する内外に処されているお姿を拝見し者、凄惨そのものでした。この得ませんでした。

状況を目のあたりに見て陛下を守り、国民を守る現役でありながら日本国家を滅亡させた事への責任感を痛切に感じました。鉄橋から坂下門、喚門と来ましたがどこも同じ状態でした。後の情報でク

まざるも没入させられた日本人の姿をこれから国を担っていく日本の若い人達はしっかり見つめて頑張つてほしいと思います。終わりに日本国の平和と皇室の弥栄を祈念して拙文を終わります。

近藤国太郎氏の略歴

戦時中は近衛兵として勤務、自らの命をかけて国家の安泰・護持に専心、崇高な体験し、特に終戦時の玉音放送の録音版の搜索は今でも明晰に脳裏に焼き付いていると話す。運転免許を取得して五十年、無事故無違反で来られたのも常に身の安全、命の大切さ、思いやりの心が染みついていたからこそ達成出来たと思う。戦後の食料難に立ち向かい、草地改良、基盤整備に取り組み、牛乳の増産、種芋馬鈴薯の一大産地を築いた基礎は馬鈴薯補助員としての近藤さんの卓越した指導力である。

私も農家の時代、何度か馬鈴薯栽培の技術指導を受けたことがあります。旧八雲農協の役員、八雲農政協議会会長、道南農連酪農対策委員長、山崎老人クラブの会長等、数々の要職を務め、八雲の農業をリードしてきました。